報　告

「臨地実習指導者研修セミナー 2011」報告：修了後のアンケートからみた評価

Evaluation of 2011 Nursing Practicum Instructor Seminar (NPIS) through questionnaire

吉田 文子　堀内 ふき　橋本 佳美　水野 照美　宮﨑 紀枝　鈴木 千衣
八尋 道子　征矢野 あや子

Fumiko Yoshida, Fuki Horiuchi, Yoshimi Hashimoto, Terumi Mizuno,
Toshie Miyazaki, Chie Suzuki, Michiko Yahiro, Ayako Soyano

キーワード：臨地実習，教育方法，指導者研修
Key words : nursing practicum，teaching strategy，instructor seminar

Abstract

The purpose of this report was to evaluate the Nursing Practicum Instructor Seminar (NPIS) using a nineteen-item questionnaire. Forty-three instructors attended the seminar, and 42 (97.7 %) returned the questionnaires. Findings demonstrated that lectures, recitations and group discussions were successful in developing deep understanding of the purpose of this seminar: the intimate connection between teaching strategies and teaching philosophy. Some topics were suggested for the seminar of 2012.

要旨

本報告は、看護学教育の充実に向けて、間歇的に3日間（計16時間）の日程で実施した「臨地実習指導者研修セミナー」の概要紹介および、本セミナーの日程、内容、目的・目標の達成度等について全プログラム修了後に受講者43人に実施したアンケート（回収率97.7%）を基に評価したものである。結果は、セミナー日程・学習量は適当であり、多くの受講者は、講義・演習を通して他者の意見交換や看護をめぐる動向や知見から自身の教育観再構築や、指導者の役割や指導方法（教育方法）について深く考える機会となっており、本セミナーの目的は達成できたと評価できる。また、次年度以降の企画への示唆も得られた。

佐久大学　Saku University School of Nursing

Ⅰ．はじめに

看護学基礎教育課程における臨地実習科目は課程の3分の1を占め、その授業は教育機関の教員と実習先の臨地実習指導担当者との連携によって行われている。大学においては指定規則の充足にとどまらず、平成23年3月には、看護学教育の質的保証として「学士課程版看護実践能力と卒業時到達目標」（文部科学省, 2011）が提示された。そこでは看護実践が5つの能力群、20の看護実践能力として明記されており、これまで以上に、各大学で教育課程の充実と看護学教育への在り方が問われる時代に入ったといえよう。

学生にとって、臨地実習は個人あるいは、家族、集団、地域への看護のプロセスを通して臨床的判断を培う場となり、看護の醍醐味を体験できる機会であると同時に、実習への不安を抱えるものも少なくない。学生の臨地実習への不安調査からは、指導環境に関する不安が最も高い（Kim, 2003）とされ、新設大学である本学でも看護学教育の充実に向けた取り組みが必要であると認識し、平成20年度より臨地実習指導者研修を試みている。これまでの臨地実習指導者研修成果報告では、研修内容において、指導者の自信につながるような工夫が必要であろうとの指摘（水野ら, 2011）がなされており、本年の研修ではそれを受けて、指導者および指導予定者のこれまでの経験を効果的に活用し、実践力の向上につなげるプログラム開発を試みた。

本セミナーは、3年前（2008年）から開始した「臨床指導者研修会」を「臨地実習指導者研修セミナー」と改組し、本学で実施されるセミナーの１つに位置づけられたものである。

本報告の目的は、本セミナーの目的・目標、内容の達成度について、修了後に実施した「受講者によるアンケート」をもとに評価し、次年度以降の課題を明らかにすることである。

Ⅱ．「臨地実習指導者研修セミナー」の概要

1．セミナー参加者の募集

領域実習受け入れ先の施設代表者を通じて、指導者または指導予定者の参加を募った。

2．セミナーの目的と目標

目的を「看護基礎教育における実習の位置づけならびに、臨地実習場面における効果的な指導方法を理解し、自己の教育観を再構築する機会とする」とし、以下の3点を目標とした。

1）自己の看護職者としての既成概念（価値観）の‘ふりかえり’を通して、自己の教育観を明確にできる。
2）効果的な臨地実習指導をするための知識や技術を学び、臨地実習指導者としての役割を自覚できる。
3）臨地実習における指導方法の原理を理解できる。

3．セミナープログラムの特徴および実際（表１）

本セミナーの開催は、間歇的3日間、計16時間で実施され、受講者総数43人、うち指導経験者は33人（76.7%）であった。

＜プログラムの特徴・配慮＞

1）本セミナーでは、学びの過程で生じるとされる‘エラー（error）’を安心して体験できるよう、受講者以外の聴講をご遠慮いただき、自分を躊躇なくさらけ出せると感じる空間を受講者への学習環境として調整した。また、受講者にも、学びの過程で生じる失敗体験をしてよい場であることを伝えるとともに失敗ができる環境保持のためのルール（他者の発言を失笑しないなど）を伝えた。

2）セミナーの実施は、後期の領域臨地実習指導開始前とし（今回は、実習開始直前および1クール目の実習修了直後）、受講期間中

表１　セミナープログラム

月　日	時　間	内　容	具体的内容	講　師
9/7	9:00- 9:10	開講のご挨拶		学長　竹尾 惠子
（水）	9:10-10:20	本学カリキュラムの特徴	本学の特徴と学士課程教育のねらい	堀内 ふき
	10:30-12:00	看護教育の目的と方法	看護基礎教育の目的、学習者観、教育観	吉田 文子
	13:00-14:30	看護の動向	看護の動向、看護観	橋本 佳美
	14:40-16:10	実習指導者の役割(1)	演習　グループワークを通して課題を解決	宮﨑 紀枝
9/9	13:30-15:00	実習指導の方法	より効果的な指導方法の実際	水野 照美
（金）	15:10-16:40	実習指導者の役割(2)	演習　グループワークを通して課題を解決	鈴木 千衣
9/30	13:30-15:00	看護倫理	実習にかかわる倫理問題	八尋 道子
（金）	15:10-16:40	教育観の再構築	教育観再構築、キャリアビジョン	吉田 文子
	16:40-17:00	終講のご挨拶	アンケート、修了証授与	学部長　宮地 文子

に現場に戻った際にも（学び）が生かされるように間歇的3日間とした。

３）プログラムの進め方は、最初に受講者が目標を共有できるよう、目的・目標の説明を行い、次に、教育観等の再構築のため、主に演習等を通して現在の自身の価値観に気づき、実習指導方法への学びを深められるようにした。

＜プログラムの実際＞

本セミナー企画にあたり、セミナー講師を中心として講義・演習内容について検討を行い、講義形式と演習形式を組み合わせた8つのセッションを用意した。

●第1セッション「本学のカリキュラムの特徴」の講義では、学士課程における看護学教育の在り方と本学のカリキュラムの特徴について概説した。

●第2セッション「看護教育の目的」の講義では、ICNの看護学教育の目的を確認するとともに、受講者のこれまでの教育観・学習者観を‘ふりかえる’機会とした。また、学習環境への導入セッションとしてアイスブレィキングをセットした。

●第3セッション「看護の動向と看護観」の講義では、看護の動向と求められる看護の力量について知見を得た後に、各自が看護観について考察し、「私の看護観」としてまとめられるようにした。

●第4セッション「実習指導者の役割(1)」の演習では、学生が実習中に困った事例を提示し、配付の「グループワークの進め方」を参考に、あらかじめ編成されているグループでの討論を通して、受講者が指導場面における自己の価値観に気づく機会がもてるようにした。

●第5セッション「より効果的な指導方法の実際」の講義では、受講者は第4セッションでの気づきをベースにして、講義を受けると想定し、臨地実習の開始前・中・後のそれぞれで、具体的な指導方法について解説した。

●第6セッション「実習指導者の役割(2)」の演習では、1回目とは異なる事例（実習記録に対しての指導）に対して、受講者が各自で事例の実習記録にコメントを記述した後、第１回目の演習と同じグループで再度、指導のあり方についてディスカッションを行い、他の受講者の教育観や指導の在り方について知る機会とした。

●第７セッション「実習にかかわる倫理問題」の講義では、看護倫理の原則を解説し、看護学生が体験しやすい２つのケーススタディを通して、一部演習形式を用いて、看護倫

理問題の明確化とその解決の仕方について学べるようにした。

●第8セッション「教育観の再構築、キャリアビジョン」の講義では、初日に受講者から提出された「教育観」を利用して、教育の在り方について再確認した。さらに受講者から出された「実習中困っていること」について、受講者間で共有し、教育には目標があり、その教育とは学習者を知ることから始まることを再確認する場とした。また、自身のキャリアビジョンを描き、指導者として専門職として、一人の人間としてのキャリアワークを確認する機会とした。

Ⅲ．受講者アンケートの実施と結果

1．アンケートの実施方法

アンケートへの協力依頼は、全プログラム修了時に受講者全員に対して呼びかけた。アンケートの目的を口頭で説明し、主旨に賛同が得られる場合は、その場で記入してもらい、会場出口に設置の回収箱に入れてもらうようにした。なお、アンケートは連結不可能匿名化とした。

２．アンケートについて

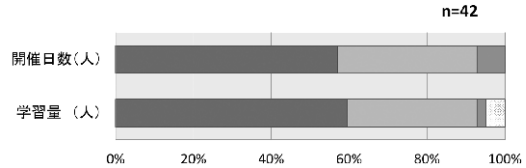
アンケートは、３つの大項目で構成し、大項目Ⅰでは、①日程等　②内容　③目的、目標の到達度の３点について質問し、大項目Ⅱで「セミナーで印象に残った学び（知的に刺激されたこと）への記述を求めた。大項目Ⅲでは、セミナーへの要望等とした。Ⅰについては、Likert scale（1 to 4）【1－思わない】【2－あまり思わない】【3－やや思わない】【4－思う】とし、Ⅱでは、自由記載による回答を求めた。なお、今回の報告箇所は、ⅠおよびⅡとする。

2．アンケートの結果

回収率は、97.7％であった。

1）開催日程（日数）と学習量（図１）

本セミナーの開催は、9月7日（水）（１日；8時間）、9日（金）（午後；4時間）、9月30日（金）（午後；4時間）の間歇的学習で計16時間であった。「開催の日数は適切だった」「セミナー全体の学習量は適切だった」の両設問に対して「思う」「やや思う」が92.9％であった。また、少数ではあるが開催日程についての記述が4件あり、その内容は、「午前・午後共に実施」したうえで、日数は「1～3日」を適切としたものであった。



	学習量（人）	開催日数（人）
思う	25	24
やや思う	14	15
あまり思わない	1	3
思わない	0	0
未回答	2	0

図１　開催日数と学習量

２）目的・目標への到達度（図２）

本セミナーの主要目的「臨地実習の効果的な指導方法の理解」と「教育観の再構築の機会」とから、３つの目的を設定した。

⑴「セミナーの前後では『教育観』に変化があった」については、「思う」「やや思う」の回答が90.5％（38人）、「あまり思わない」「思わない」は7.1％（3人）、未回答が1人であった。

⑵「セミナーを通して、自身の意外な部分に気づくことができた」については、「思う」「やや思う」が76.2％（32人）、「あまり思わない」が19.0％（8人）、「思わない」が4.8％（2人）であった。

⑶「実習指導者の役割について深く考えることができた」については、「思う」「やや思う」が、95.2％（40人）であり、「あまり思わない」「思わない」は、4.8％（2人）であった。

⑷「セミナー目標達成への努力をした」につ

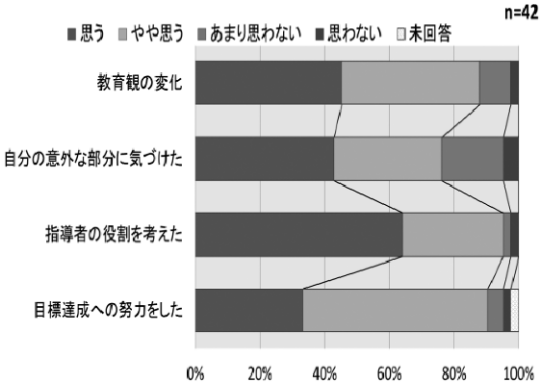


図２　目的・目標についての到達度

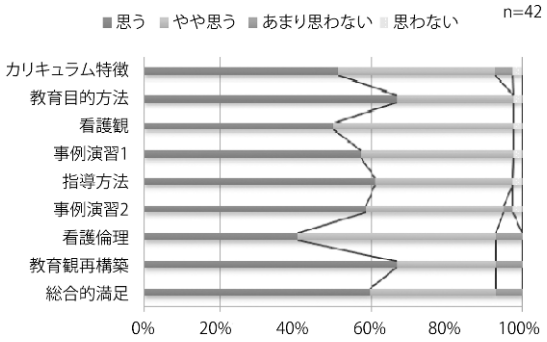


図３　プログラム

いては、「思う」「思わない」が、90.5％（38人）であり、「そう思わない」「思わない」が7.1％（3人）、未回答が1人であった。

３）プログラム（図３）

「指導上の参考になったか」の質問に対して、8つのセッションともに「思う」「そう思う」の回答が9割を超え、「総合的に本セミナーが満足できるものであったか」についても9割が「思う」「そう思う」と回答していた。総合的満足について「あまり思わない」と回答した3件のアンケートからは、開催日程を5日へ増やせないかとの要望が1件、日程と学習量は適切と回答しながらもセッションすべての質問で「あまり思わない」「思わない」に回答が1件、他の１件は、他の回答とは違い、参考になったセッションとそうでないセッションがあるとの回答であった。

４）セミナーで印象に残った学び（知的に刺激されたこと）（表２）

自由記載を求めたところ、22人から29の記述が得られた。

記録単位29を質的にみると、【教育観・学習者観】【意見交換】【キャリアビジョン】【追体験】【その他】の５つに分類された。記述が最も多かった分類【教育観・学習者観】では「教育とはどういうことか考えられた」「自身の指導方法や役割が確認できた」とあるように、教育の概念を自己の価値観と照らし合わせて回答するものであった。

次に多かった記述分類は、グループワークを通して「新しい発見」「刺激」が得られた【意見交換】についてであった。

続いて、教育を通して自身の生き方を考える【キャリアビジョン】、学んだことを活用できた【追体験】、セミナー講師の体験、についてであった。

Ⅳ．総括評価

本アンケートの結果からみた評価は、以下のように総括できる。

1）セミナー日程・学習量について

受講者の回答からみて、間歇的な3日間のセミナー実施で適切だったといえる。ただし、少数ながらも日数の延長（3日を5日）や、半日でなく一日を通して実施を、との要望もあったことから、開始と終了時間への配慮が必要である。学習量についても受講生の回答からは本日程としては適切だったといえる。

2）目的・目標の達成状況について

本セミナーのプログラムは‘ふりかえり’を通して、自己の教育観・臨地実習指導者としての役割が明らかにされることを期待し企画された。

自己の教育観再構築の機会には、少なくとも、他者の考え、思いやその表れ、それらへの感性や配慮のあり方も含めて自己の傾向を安心してふりかえることができる体験が必要であろう。他方では、‘教育とは’‘指導者の役割とは’‘看護をめぐる動向は’等の知見

表２　　セミナーで印象に残った学び（知的に刺激されたこと）

カテゴリ	自 由 記 載 よ り 抜 粋　　記録単位=29
教育観・学習者観 14	・教育とはどういうことか考えられたこと。 ・現在の自身の指導方法や役割が確認できたこと。 ・自らの価値観の特徴を知れてよかったと思ったこと。 ・自身の学生時代の指導者のイメージは、「厳しい」という印象だったが、研修により、意欲を持った学生を上手に育てたいと思うようになったこと。 ・セミナーを通し高まった目標、自らの教育観を胸に行動したいと思ったこと。 ・看護を教えることに不安があったが、自信がもてたこと。 ・セミナーの中では、「失敗をしてもよい」といわれ、緊張が解け安心して受講でき、この環境を学生とのかかわりにも作りたいと思ったこと。 ・指導者は学生が、発見するのを助けるという考えを知れたこと。 ・学生の不安を少しでも軽減させ、一緒に学びができるように関わること。 ・改めて学生と向き合う気持ちを確認できたこと。 ・指導を楽しむということ。 ・指導は、まず自分が楽しいという気持ちをもてるよう、共に学びたいと思ったこと。 ・あたりまえのように学生指導してきたが、自信がついたこと。 ・学生をほめてほしいという教員の思いが伝わり、自分もそう思ったこと。
意見交換 10	・グループワークがとても参考になったこと。（2） ・グループワークでの意見交換で刺激をもらえたこと。（2） ・グループワークで沢山の意見を聞け、新しい発見があったこと。（3） ・グループワークで臨地実習指導体験者の話が聞け、学びになったこと。 ・沢山の人の意見を聞き、書くことで勉強になったこと。（2）
キャリアビジョン 3	・なぜなぜと思いながら日々の業務にあたりたいと思ったこと。 ・キャリアビジョンで、学生さんが上向きになっていける手助けができる人間になりたいと思ったこと。 ・自身のふりかえり、自分の人生を見つめなおせ、沢山の学びがあったこと。
追体験 1	・セミナーで学んだことを生かして学生指導したら、伸び悩んでいた学生に大きな変化があり、患者ケアに積極的になったこと。
その他　1	・講師の実体験が心に残ったこと。

に接する体験も不可欠である。両者は自己を照らす鏡でもあり、本セミナーはそれらの視点に立ち、自己の現状と今後の課題を俯瞰し‘ふりかえる’メタ認知の機会として期待された。回答の傾向は、「自身の意外な部分に気づけた」は76.2％にとどまったが自由記載では、知的刺激を受けたを始め、自己の価値観の再構築への期待を含めた記述内容が最も多く、このことは開講時点で受講者が持つ、学習の構え（学習セット）に加え、経験（学習レディネス）から学習をスタートさせる成人学習モデル（アンドラゴジー）に基づいたプログラム構成の効果でもあるといえよう。各自の経験を表出（発言したり記述したり）し、自身を客観視し、知識に接し、その知識を経験にむすびつける理解、というプログラ

ムの進行を通して、教育観の変化とともに実習指導者としての役割への自覚と理解を深めていただけたと推察できる。

3）プログラム内容について

本プログラムを構成した8つの各セッションともに9割以上で「指導上で役立つ」との回答を得た。これは前２項でもふれたように、受講者個々の学ぶ力の相互作用によるものと、本プログラムの内容構成とのコラボレーションによる成果であると思われる。

以上のことから本セミナーの目的は達成できたと総括できる。

Ⅴ．今後の課題

1）セミナー開催時間については、間歇的な日程でよいが、半日単位でなく、一日単位の日程編成について考慮する必要がある。
2）セミナー開催時期については、後期実習前が望ましい。講師担当者のスケジュール確保が困難であったため、早い時期にセミナー開催日を決定する必要がある。
3）プログラムについては、受講者が経験してきたことの意義を他者の経験や知識と結びつけて吟味できる機会提供として、内容・方法の在り方をさらに充実させる必要がある。

Ⅵ．おわりに

臨地実習は学生にとって「すべて」であり「始まり」である。学生にとって、臨地実習に臨むとは、生涯初めてと言ってもよい、現実に入っていく心境だと思われる。怖いかも、緊張で倒れるかも、器具の触れあう音、学内実習とは比べものにならない、本物の医療現場、看護の場を体験する。そこでは、資格のための実習などと、のんきなことは言っておられず、思わず気合が入り、「はい」の一言にすべてがかかってくる。実習に臨む学生にとっては臨地実習指導者の存在はあくまでも大きく、その指導のいかんによって、学生は自身の思考、判断、実践の過程を自ら評価する力を一層育てることができるであろうと信じる。

最後になりましたが、アンケートにご協力いただきました受講者の皆様に感謝申し上げますとともに、この場をお借りしまして、本セミナーへのご理解と本学の教育へのご理解・ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

文献

Kim, K. H. (2003). Baccalaureate nursing students' experience of anxiety producing situations in clinical setting. Contemporary Nurse. 14 (2). 145-155.

水野照美, 橋本佳美, 宮﨑紀枝, 吉岡恵, 清水千恵, 小室三千代 (2011). 平成21年度臨床実習指導者研修会の実践報告－前年度の修了者との協働－. 佐久大学看護研究雑誌. 3巻1号. 27-36.

文部科学省 (2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報.